

〔原著論文〕

自我体験の生起と心身問題における 価値観の関連についての理論的展望

A Theoretical Overview of the Relationship between "Ego-experience"
and the Sense of Values about a Mind-body Problem

天谷 祐子

Yuko Amaya

要旨：本研究は、「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—の生起により、哲学における心身問題における価値観に影響を及ぼすという仮説について、日本において心理学的にアプローチするための可能性を理論的に論じたものである。まず自我体験において問題とされる「私」の特徴が、心理学一般における自己論の枠組みとは異なり、哲学的な特徴を持っていることを論じた。その後心の哲学の分野における心身問題の解決方法と現状を概観し、一般の人が心身問題の解決にあたって哲学的解決にどこまでアプローチできるのかを論じた。そして一般の人が心身問題に関しては「二元論者」であり、その考えには低年齢においては「(魂に関する)心の理論」の影響を受け、長じては宗教的影響を受けている可能性を概観した。日本における文化的宗教的背景を考慮に入れたうえで、自我体験の生起と心身問題における価値観の関連について考察した。

キーワード：自我体験, 心身問題, 死後の「心」

1. 自我体験における「私」とは

① 「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験とは

「私はなぜ私なのか」という問いは、天谷(2002)によると、小学校高学年から中学の時期に約半数の人に生起する現象である。天谷(2002)による中学2年生男子の自我体験の報告として「この体を選んだ、選んだのかどうかはわからないんですけど、この体と気持ちが合わさっているから、何でそれがこれだったんだろう」という表現がある。この報告の中における「私」とは、通常の心理学における多くの自己論で扱われる「自己」「私」の定義・特徴とは異なり、特異点のような「視点」「主観」のようなものであると考えられる。

本論文では、自我体験で扱われる「自己」「私」の特徴と、心理学における多くの自己論におけるそれとの相違を論じた上で、自我体験で扱われる「自己」「私」の持つ独特の視点が、心理学における他の変数とどのように関連する可能性が考えられるかを論じる。具体的には哲学にお

ける心身問題に対する価値観を心理学的視点から捉え、自我体験との関わりを展望する。

② 心理学における多くの自己論と自我体験における「私」の相違

ここでは、心理学における多くの自己論にて扱われる「私」「自己」の特徴と、自我体験において問題とされる「私」「自己」の特徴の相違点について述べる。自我体験において問題とされる「私」「自己」の特徴の第1は、「他者性」の排除である。自我体験における「私」とは、比較対照としての、また参照枠としての他者を必要としない。自我体験における「私」とは、異なる他者との具体的な相違や、「私」にしか見られない・持ち合わせていない特徴、日常生活でどのように他者との間で関係を持つかといったふるまい方に関する視点は必要としていない。「『特別な私』という主観・視点」とも言えるべきもののみが問題とされる。自我体験において扱われる「私」とは、近代哲学における「意識」「精神」「心」といった表現の指すもの、そういった観念のみが思考の対象とされている視点と類似しているように思われる。例えば哲学者の永井(1991)による〈私〉という表現がそれに相当する。

しかし、私たちが日常生活を送る上で、また自己の特徴やありようを記述したり、そのダイナミックなシステムのありようを追求したりする上では、「他者性」が重要であることは言うまでもない。実際、心理学における多くの自己論は、多かれ少なかれ他者を意識したものであり、より実生活における自己のふるまいを捉えるためにはなくてはならない視点である。例えば、他者が存在して初めて自己を知ることができるとしたクーリーやミードは、自己を他者を媒介として認識できるとした代表格であろう。クーリー(1902)は自己の社会的構成を重視し、またミード(1934)も言語やモノを媒介とし他者からの反映を通して自己を知ることができると述べ、社会的性質を考慮に入れている(金川, 2012)。またMurkus & Wurf(1987)による、その時々で作動的自己概念(「そのときどきの私」)とそれらのセットを統合した力動的自己概念という考え方も、他者を含めたその人が置かれている環境を考慮にいれ、より動的かつ社会的存在としての自己を捉えようとしている(金川, 2012)。さらにGergen(1987)は自己に関して、個の独立性を批判し、関係性の中であらわれてくる自己に関する語りへ注目することを提唱している。これらの流れは、他者と自己の間や、他者を含めた環境の中に存在する自己がどのようにふるまうかという、より実践的な自己のありように近づこうとするものである。それにより、自己に関するより分析的な心理学研究が行われているのは疑問の余地はない。

ただこの「他者性」を排除して自己を扱う視点は、自我体験における「私」を議論する上では非常に重要である。なぜなら自我体験において出現する問いは「なぜ他の人ではない」、または「なぜ他の時代ではない」、または「なぜ他の場所ではない」、または「なぜ他の感覚ではない」、「この私」なのかという問いのみに特化しており、すべては「この私」が存在することそのものに対する問いの方に重点が置かれているからである。そして、この問いの探索の中で、「私」の

日常の振る舞いのありようや、他者との相違、文脈によって異なる「私」等の視点は全く出現してこない。

そして心理学における多くの自己論にて扱われる「私」「自己」の特徴と、自我体験において問題とされる「私」「自己」の特徴の相違点の第2に、「私」の「特徴のなさ」が挙げられる。自我体験における「私」「自己」とは、繰り返すが『特別な私』という主観・視点を指し、その「私」には具体的特徴は付与されていない。この点に関しては哲学者の永井（1991）が、思考実験や例を数多く挙げて説明しているが、その中の一つに「その人物の持ついかなる性質とも独立に成り立つ事実」と述べ、「ある人格を他の諸人格から分かつものは身体や記憶をはじめとするその諸属性の差異であるが、＜私＞（注・永井はこのように表記している）を分かつものは属性上の差異ではない」としている。つまり、その人だけが持つ特徴や振る舞い方等の分析的視点は、自我体験における「私」を議論する際には問題とされない。

もちろん、一般的な心理学における自己論においては、社会の中で生きる自己が、他の人格とは異なりどのような特徴を持つか、またどのような振る舞い方をするかという視点がきわめて重要であることは疑いの余地がない。また、そのような研究が心理学において進められることにより、実践的な自己のありようを理解することに貢献するだろう。しかし、自我体験における「私」に関する議論においては、一般的な心理学における自己論の「特徴を追求」する視点は問題とされないのである。

以上のように、自我体験における「私」「自己」の視点が、心理学一般において扱われる多くの自己論の枠組みをそのまま適用することが困難であることがわかる。それにより、自我体験におけるこのような「私」「自己」の特徴が、一般的な心理学における諸変数とどのような関わり、もしくは影響を持つのかという点に関して、参考にすべき理論・先行研究がほとんど存在しなくなるという問題を抱えることになる。

③ 自我体験の生起が他要因に及ぼす影響

自我体験における「私」「自己」の視点を持つことが、そうでないことに比べて、一般的な心理変数とどのような関わりを持つのか、ということに関して、具体的な論考はほとんど見られない。少ないながら見られる知見として例えば高石（2004）は、自我体験の持ち方がその後の人格形成に影響を及ぼすのではないかと述べ、レヴィンジャーの自我発達SCTにおいて、自我体験を持った人がそうでない人に比べ、高い自我発達段階にあるという知見を見出している。また渡辺（1992）は、自我体験により、その後の世界観形成に影響を及ぼす可能性を示唆している。しかし渡辺（1992）では、具体的に「世界観」とは何を指しているのかについては述べられていない。

天谷（2010）は、自我体験を経たことによる意味に関して、調査対象者に対して、「具体的にどのような意味があったか」を自由記述にて回答を求めた結果を質的に分析している。その結果、

自己理解や自己存在の実感といった「自己」に関して、視野の広がりやわからないものの存在といった「認知的」な点に関して、生命・人生を考えるとといった「他分野への思考」に関して意味を見出すというカテゴリが比較的多く見られた。これらのカテゴリは、既存の心理学の構成概念としては捉えにくい内容でもある。少なくとも調査対象者自身がこれらの意味を見出しているのだが、研究者が設定する客観的な変数にはどのようなものが考えられるのかを検討しなければならない。

本研究では、自我体験における「私」「自己」の定義・視点が哲学的なニュアンスを持っていることに鑑み、哲学的な問題、特に心身問題に関する考え方との関わりに注目する。

2. 哲学における心身問題に関する心理学研究の可能性

① 哲学における心身問題とは

「心とは何だろう。」「心身は正確にはどう関係しているのだろうか。」「私は身体をもった心なのだろうか、心をもった身体なのだろうか。」「心身問題」とは、心的なものや物理的なもの、心と身体がどのように関係しているかに関する回答に関して哲学的に考えるテーマである（プリースト, 1999）。このようなテーマを扱うのは、哲学においては「心の哲学」といわれる分野である。プリースト（1999）はこの心身問題に関して、西欧の哲学者がどのように解決しようとしたかを一般向けに紹介・解説している。まずはプラトンやデカルトといった心身二元論が紹介されている。訳者の河野（1999）によると、心身二元論とは、心と身体はともに存在し、それらが互いに独立であるとする説である。デカルトの「心と身体は互いに作用し合う」とする「心身相互作用説」は、我々の日常的な直観にも適い、心についての素朴な考え方に根付いているという意味で、「デカルトの遺産」と呼ばれることもあると言う。また岡田（2012）によると、デカルトの心身二元論においては精神（魂）は不死であるということになる。

その他、プリースト（1999）は、論理的行動主義（ヘンベル、ライル、ヴィトゲンシュタイン）、観念論（パークリ、ヘーゲル）、唯物論（プレイス、ディヴィッドソン、ホンダリック）、機能主義（パトナム、ルイス）、二面説（スピノザ、ラッセル、ストローソン）、現象学（ブレンターノ、フッサール）といった心の哲学の代表的立場から、それぞれ心身問題についてどのように解決しようとしているかを述べている。訳者の河野の解説を要約しながら、それぞれの流派における解決方法を以下に述べていく。

第1に論理行動主義では、心を「何か隠された内的なもの」とする考えを否定し、行動として理解しようとする。第2に観念論では、心から独立した物質の存在を否定する考えで、例えばヘーゲルは「神や人間の精神のうちには観念があるが、この観念を超えた物理対象は存在しない」とする。しかし現代の心の哲学の潮流は物理主義であり、現在かえりみられることは少ないようである。第3に唯物論では、「心と脳は同一である」とする考えであり、例えばプレイスは、「心と

脳はそれぞれ異なる意味を持つが、偶然に同一だ」として両者の関係を捉える。第4に機能主義のパトナムは、「感覚入力と内部状態によって人間の行動が定義できる」とされ、内部状態が「心の状態」に相当するとしている。岡田（2012）によると、機能主義の根本哲学は、「何から出来ているのか（素材）は問題ではなく、どんな機能をもつかが問題である」という考え方であり、心は「多形実現性」を持ち、「複製可能」であるとする。思考実験として、「脳内のニューロンが本来のものではなく、人工のものに置き換えられたとして、それは『私』と言えるかそうでないか」という例が挙げられている。第5に二面説では、心でも物でもない別のある実態の一つの「側面」として心の状態が扱われ、「実体はただ一つだが、それには二つの性質がある」と考える。例えば二面説のスピノザは心身の両者を何らかのかたちでくっつけようと（岡田，2012）しており、「心身平行説」とも名づけられている。これは精神と身体の間、デカルトが認めたような「働きあう」関係を認めず、驚くべき「対応関係」「秩序」が存在するとした。第6に現象学では、二元論における心と物の剥離を独自の方法—私たちの経験内容をありのままに述べること—からはじめ、なぜそのような考えが生ずるのかを見極めようとする考えである。これらの一連の代表的な立場から解決にいたる筋道の中で、「私」を複雑な物理対象にすぎないと考える哲学者や、「不死の魂」と考える哲学者、心的・物理的両方の特徴を持つと考える哲学者も存在するとブリスト（1999）は述べている。

② 現代における哲学分野の心身問題の位置づけ

前項からは、心身問題に関してそれぞれの立場が共通した方向性を持って解決に近づいているわけではないことがわかる。また、哲学の分野内において、「心の哲学」の分野の人気は、決して低いものではない（太田，2010）。しかし太田（2010）によると、初心者や哲学の入門者によくわかるように書かれた日本語の研究書が圧倒的に少なく、周囲の人には理解されにくいという。ここ10年ほどで心の哲学に関するシリーズが編まれたり、心の哲学に関する書籍が刊行されるようになり、少しずつ状況が改善されるようになってきたと言うが、多くの人が一度や二度は「心と身体はどのような関係にあるのか」という疑問を持ったことがある（河野，1999）にもかかわらず、その「多くの人」は、哲学の書籍に解答を求めずに問いをそのままにしているのが現状に近いのではないと思われる。

さらに20世紀前半の哲学においては、「言語論的転回」と呼ばれる大きな変化を経験した（岡田，2012）。哲学者の研究方法が、「意識」「観念」「心的表象」を分析の基礎とするスタイルから、「言語」を分析の基礎とするスタイルに変わっていった。その結果、精神や意識について直接何か言うタイプの哲学は、急速に時代遅れのものとなった（岡田，2012）。

このように、心身問題に関しては、現代における哲学分野においては、一般の人や初学者にもわかるような分析方法を通して、ある一定の方向性を持って解決に近づくような展開にはなっ

おらず、そのうえ最新の哲学的議論のメインストリームからも外れつつあるようである。

③ 心身問題に関する心理学研究の可能性

心身問題に関して、心理学の分野からアプローチできるのはどのような切り口だろうか。一つに、心身問題に関する学問的解決を目指すのではなく、一般の人が心身問題に関してどのような考えを持っているのか、またそのような考えはどのように発生し、発達に伴い変化するのか、またはしないのか、を科学的に明らかにする切り口が挙げられる。

発達心理学者のブルーム（2004）は、ヒトは「常識的な二元論者」だと述べている。ヒトには、他の動物とは異なり、他者を「体以上」のものとして見る、つまり体を魂が宿るものとして見る傾向があると言う。この考えは心身問題に関して、一般の人が素朴に「デカルトの遺産」を有している可能性、つまり心身問題に関して二元論的な考えを持っている可能性を示している。哲学分野の現代における議論に比べると、一般の人の考えは非常に「古典的」な枠組みを依然有しているようである。

また心理学者のBering（2002）は、大学生を対象に、質問紙法を使って、「人が事故で死ぬ」という場面を設定して、死後も様々な認識や感情を持つことができるか、つまり「心」が残り続けると思うかどうかを調べている。具体的には、リチャードという名の教師-交通事故で即死した男一の心的能力について、死後も「死ぬ直前に口に入れたミントキャンディーの味を感じることが出来るか?」、「彼は生き返りたいと思っているか」等の質問を用意し回答を求めた。その結果、ほとんどの学生が「心が残り続ける」という推理を示す回答をし、さらに自身が「消滅論者」であると回答した者の32%は、リチャードの感情と願望が仕事も生き続けると回答していた。つまり、「心」と「身体」は別ものとして存在し、かつ「心」は死後も残り続けるという価値観を有している人が大多数であるという知見と言える。この研究は、一般の大学生が心身問題に関してどのような考えを持っているのかを明らかにしようとした研究であると考えられる。

またこのような考え方は、大人になる前の小さい子どもはどのように認識しているのだろうか。このような考え方は生得的なのか、または何らかの経験を経てどこかの時期で獲得するのだろうか。Bering & Bjorklund（2004）は、3歳から12歳児を対象に、人形劇を見せる方式で、動物が死んだ後の心の働きについて尋ねている。「（食べられてしまった）主人公の子ねずみは家に帰りたいと思うか」、「病気になるか」、「花の匂いをかげるか」等について尋ね、死んだ子ねずみが大人のねずみになることがあるか否か、ねずみの脳が働いているか否かについても回答を求めた。多くは、死んだ子ねずみが大人になることはもうなく、脳も働いていないと認識しているに関わらず、死んだ子ねずみが考えたり感情を持ったりしていると答えた。つまり、子どもであっても、大学生とほぼ同様の考えを有していることがわかる。この研究により、子どもも心身問題に関して「身体」と「心」を別と認識しており、精神は少なくとも死んだ直後には「死んでいな

い」と捉えていることが明らかにされたと言える。

さらに、このような考え方は、環境による影響、例えば宗教的働きかけにより変化が見られるのだろうか。Bering & Bjorklund (2005) が、スペインの公立小学校とカトリックの小学校の子ども達を対象に死後の子ねずみの「心」が生き続けるかどうかを尋ねている。その結果、5,6歳の子どもの多数が、学校の違いに関係なく、生き続けると回答したと報告している。しかし、年長になるにつれて、カトリックの学校に通う子どもは、公立学校に通う子どもよりも「心が生き続ける」と回答することが多くなり、公立学校では「死ぬと心がなくなる」と考える子どもも少数ながら存在しているとした。この知見は、発達の初期には、既に心身二元論的な考え方を有しているが、その後宗教的な働きかけがあるかないかにより、その考えに変化が生じることを示唆している。この点についてBering (2011) は、子どもは心的能力に関して、死後も生き続けるという信念を持つことがデフォルトであり、その後の教育や宗教的文化的影響により、「あの世に対する信念」の方向に向かうのではないかと考察している。

またBeringは「心そのものが脳が完全に死んだあとも生き続けるという直観」—これをヒト特有の「錯覚」であるとBeringは述べた上で—には「心の理論」が直接的に関与していると提唱している。Bering (2011) の指摘する「心の理論」は、心理学で話題とされる「心の理論」の拡張版である。心理学で話題とされる「心の理論」は主に幼児を対象とした「他者の意図」を「心 (mind)」として他者の「心」を理解できるか否かということを経々の課題を設定して研究がなされているが、Beringは「魂 (Soul) に関する心の理論」という形で拡張して議論を展開している。

④ 心身問題や死後の「私」に関する研究における文化的宗教的相違

「私」の捉え方に関する文化的相違について、社会心理学における自己の捉え方に関する理論から述べる。西洋的な価値観と東洋的な価値観が存在し、そのありようを対照的に論ずる研究が見られる。Markus&Kitayama (1991) が指摘している文化的自己—相互独立的/相互協調的自己観に関する理論がその代表である。Markusら (1991) によると、北米ヨーロッパ系アメリカ人の文化と日本文化の中にある対人関係の成り立ちと主体性を比較すると、北米における文化的自己観は「相互独立性」がより優勢であり、日本における文化的自己観は「相互協調性」がより優勢であるという理論である (内田, 2012)。文化的自己観に関するこの議論は、それぞれの文化における他者との関係性や社会的ふるまいに焦点を当て、その中での「自己規定」に関する理論であると考えられる。

一方、他者や社会、広い意味での文化とは切り離されたような視点での自我体験における「私」に関しては、このような「相互独立性」「相互協調性」の考え方と同様に文化的相違が存在するのであろうか。またそもそもこの自己観に関する理論を適用することが可能なのであろうか。日

本人サンプルにおける自我体験の実証研究においては、少なくとも自我体験の報告の中では、相互協調的な自己観を想起させるようなコメントは見出されていない。自我体験における「私」の捉え方は、社会的関係とは切り離されている特徴を持つことから、文化的自己観による文化的相違は存在しない可能性が考えられる。自我体験の生起率に関する文化比較等を通して今後明らかにしていくことが必要である。

次に、「心」「魂」や死後の「私」といった考え方に関する宗教的相違について述べる。Richert & Harris (2006) は大学生を対象に「心」と「魂」が存在するか否かを尋ねた結果を報告している。161名の大学生の中で、94%は「心が存在する」と答えた一方「魂が存在する」と答えたのは67%であった。また「魂」が死後も「なんらかの形で」生き続けると84%の人が答えた一方、「心」が死と同時に存在しなくなってしまうと71%の人が答えた。さらに、「魂」についてのこれらの概念は、どの宗教を信仰しているかとは無関係であることも示している。西欧においては宗教的相違を超えて、「心」「魂」が存在すると考えている人が多いことがわかる。しかし、仏教的または「無宗教」とも呼べるような日本においても同じような傾向が見られるのであろうか。日本人サンプルにおいて実証的研究を経て明らかにしていくことが望まれる。

3. 自我体験と心身問題に関する価値観のバリエーションの関連

ー自我体験が「心」をより大きく捉える可能性

ここまで、心身問題に関する日本における心理学研究の可能性を論じてきた。この心身問題に関する研究は、西欧において大多数の大人や子どもが一樣に同じ回答が見られていることが示されている。この知見は東洋、特に日本においても同様に一樣な結果が見られるのだろうか。または回答においてバリエーションが見られるのだろうか。実証的研究を通してそれを明らかにする必要がある。

第2に、心身問題に関する価値観に関してバリエーションがあるとするならば、それは日本においてはどのような要因が影響を及ぼしているのだろうか。西欧の場合にはその一つに小学校段階における宗教的働きかけが挙げられていたが、日本においては、そのような影響は考えにくいと思われる。宗教的働きかけの代替要因として考えられるものの一つとして、自我体験における「私」の捉え方が挙げられるのではないかと考えられる。

自我体験は「私」のありように対する問いである。そのような「私」について考えるほど、「私」つまり「精神」「心」の働きをより拡大して身体に付与する心的機構が働くのではないかとというのが本研究における仮説である。例えば社会心理学における研究に、私的自己意識が高い人ほど個人的アイデンティティを重視する傾向が強く (Cheek & Briggs, 1982)、ユニークネス欲求も高い (山岡, 1993) という研究がある。これらの研究は、私的自己意識が高い、つまり自己の内面について意識を向けたり考えたりする傾向が強いほど、自分自身の個性をより高く評価す

ることを示しており、自己をより過大に（「大切に」と表現しても良いかもしれない）捉えがちであるとも言える。自我体験における「私」について考えることも、「主観」「意識」の働きをより過大に（例えば自身の肉体が消滅しても「心」は消滅しないという考え）捉える方向に向かわせるのではないかと考えられるのである。

4. ま と め

本研究では、自我体験の生起が、哲学におけるいわゆる心身問題に関する考え方に影響を及ぼす可能性に関して、理論的に論じてきた。自我体験に関してより多く考えると、心身の関係の中で、「私」という「心」「意識」の及ぶ範囲をより広く捉えがちになるのではないかという仮説を今後は実証的研究を通して検証していくことが望まれる。

【文 献】

- 天谷祐子 2002 「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から 発達心理学研究,13,221-231.
- 天谷祐子 2008 自我体験と素朴理論の関連についての理論的概観と予備的検討 東海学園大学研究紀要, 13, 15-33.
- 天谷祐子 2010 自我体験を経たことによる意味の内容に関する質的分析 東海学園大学研究紀要, 15, 3-13.
- Bering, J. 2002 Intuitive conceptions of dead agents' minds: the natural foundations of afterlife beliefs as phenomenological boundary. *Journal of cognition and culture*, 2, 263-308.
- Bering, J. & Bjorklund 2004 The natural emergence of reasoning about the afterlife as a developmental regularity. *Developmental psychology*, 40, 217-233.
- Bering, J. & Bjorklund 2005 The development of 'afterlife' beliefs in religiously and secularly schooled children. *British Journal of Developmental Psychology*, 23, 587-607.
- Bering, J. 2011 *The Brief instinct: The psychology of souls, destiny, and the meaning of life*. W.W.Norton & Company Ltd. (ベリング (鈴木光太郎訳) 2012 ヒトはなぜ神を信じるのか—信仰する本能 化学同人)
- Bloom, P. 2004 *Baby: How the Science of child Development Explains What makes us human*. New York: Basic Books. (ブルーム (春日井晶子訳, 長谷川眞理子解説) 2006 赤ちゃんはどこまで人間なのか—心の理解の起源 ランダムハウス講談社)
- Cheek, J.M. & Briggs, S.R. 1982 Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Personality*, 55, 525-541.
- Cooley, C.H. 1992 *Human nature and the social order*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Gergen, K.J. 1987 Toward self as relationship (Pp.53-63). In K. Yardley, & T. Honess, (Eds), *Self and identity: Psychological perspectives*. New York: Wiley.
- 金川智恵 2012 1-1 社会心理学における自己論の流れ (Pp.4-24) (梶田叡一・溝上慎一(編) 2012 自己の心理学を学ぶ人のために 世界思想社)
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H., & Wurf, E. 1987 The dynamic self concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337.
- Mead, G.H. 1934 *Mind, Self, and society*. Chicago: University of Chicago Press. (ミード, G.H. 稲葉三千男他 (訳) 1973 精神・自我・社会 現代社会学大系10 青木書店)

- 永井均 1991 <魂>に対する態度 勁草書房
- 岡田岳人 2012 心身問題物語—デカルトから認知科学まで— 北大路書房
- 太田雅子 2010 心のありか—心身問題の哲学入門 勁草書房
- Richert,R. & Harris,P. 2006 The Ghost in my body: children's developing concept of the soul.
Journal of cognition and culture, 6,409-427.
- Priest,S. 1991 *Theories of the mind*. Penguin Books. (ブリスト (河野哲也・安藤道夫・木原弘行・
真船えり・室田憲司訳) 1999 心と身体の哲学 勁草書房)
- 高石恭子 2004 2.子どもが<私>と出会うとき (Pp.43-74) 渡辺恒夫・高石恭子(編) 2004 <私
>という謎:自我体験の心理学 新曜社
- 山岡重行 1993 ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究,9,181-194.
- 渡辺恒夫 1992 自我の発見とは何か—自我体験の調査と考察 東邦大学教養紀要,24,25-50.